

漢法苞徳塾資料	No. 502
区分	病因・診断・配穴
タイトル	天然の気への感作 その二面性について 病因の診断と治療穴の選定原理 『医黄集門』第 27 1998
著者	八木素萌
作成日	1997.09

I. 自然の感作力の両面性

「自然の力」「その影響力」は、具体的には「季候的な循環」として現れている。そう言う形で表現されている「自然の持っている影響性」「自然の感作力」と言うものが、「イノチ」にとって生活的にプラスに・積極的に寄与していれば、それは「生命への養い」である。「自然の循環」を「生命への養い」として取り入れさせる問題を論じるのが「養生」論である。

「イノチ」にとってマイナスの意味を帯びていれば、「イノチ」への傷害・多くの場合には、「病因」となる。「生命にとって歪を生じさせるもの」を具体的・個別的に診察したうえ、「命に生じている歪」―「病的状態」を「訂正」し「矯正」することによって「正常な姿に回復せしめる」論、具体的に「病因」を除き「歪」を正して健康を回復せしめる方向を論じれば、それは「医」論である。

「養生」論と「医」論の二つの側面を統合して考える為、自然の季節的循環・循環局面の特長が示している生命への影響性・影響している様相を論じている所を、「古典」おもに『黄帝内経』とその系譜の書籍から概観して見ようと思う。

季節的に変化・循環する外界状況の「生命への感作性」問題を医学的に考察している重要な例である『金匱要略』〈張仲景〉には

「……夫人稟五常・因風氣而生長・風氣雖能生万物・亦能害万物。如水能浮舟・亦能覆舟。若五臓元真通暢・人即安和・客氣邪風・中人多死。千般災難・不越三條・一者・經絡受邪・入臟腑為内所因也。二者・四肢九竅・血脈相傳・壅塞不通・為外皮膚所中也。三者・房室金刃・蟲獸所傷・以凡詳之・病由都尽……」〈臟腑經絡先後病脈証第一より〉

と記述されている。

これを意識すると「……人は五常に稟けているが、それは風氣の力で生長しているように、風氣の言うのは能く万物を生み育てるとは言え、反面ではまた能く害するものである。それは、ちょうど水は能く船を浮かべるのであるが、また他面では船を転覆させるのと同じである。もし人の五臓の元氣、真氣が伸びやかに機能していれば、健康で平穩であるが、邪氣が客氣して人に中れば多くの場合は死亡してしまうものである。……」となる。自然・外界の働きは、万物も人も養い育てているものである。だが、反面では万物も人も倒してしまうものである。人の病氣の原点は三因に取り纏めて統言して良い、それで総てなのだ、と言うのである。

この記述を一口で言えば、生命は天然・自然の「気」によって生きて生活しているが、その天然・自然の「気」の力は、生かしも殺しもするものである。それは、人のあらゆる災害（身体を傷害する原因となっているもの）を、「三因」と言う角度から捉えることができるという説である。

『外感病』の「具体的な病因」も『内傷病』の「発病契機外因」も、煎じ詰めれば、具体的には「季候的な循環」に他ならない「自然の循環」の表現・そのある局面に対して、生命活動が「感作」している「状況」に他ならない。

II. 自然の循環と生命への影響性

「三因」＝外感・内傷・不内外の三つの病因に分類している把握は、さらに具体的に『六淫』として認識される。それが、「風・暑・熱・湿・燥・寒」の「六淫」である。「風・暑・熱・湿・燥・寒」は「風＝木・暑＝火・熱＝火・湿＝土・燥＝金・寒＝水」のように五行に配当されている。これは一見して明らかなように、一年を「春・夏・長夏・秋・冬」の五期に区分する場合の、「季節の気」を命名したものであり、この「六気」が「イノチ」に影響する様相を、一口に纏めて「成・長・化・収・蔵」として表現されている。それは「季節の気」の作用特長とも言える。これが「病因」として作用したときには、正に『六淫』となり『五邪』と言われているのである。

『黄帝内経・素問』には、一年を「春・夏・秋・冬」の「四季」に見る論・「春・夏・長夏・秋・冬」の「五季」にとらえる論・「三陰三陽」の「六経」または「六季」に見る論のような三つの説が提示されている。『黄帝内経・靈樞』も同様である。

これらは「季節」を、単に「四つ」・「五つ」・「六つ」に分割して表現しているのではない。それぞれの季節の特長と、生命への影響性の様相に見られる相違を、簡潔に把握しているのである。それを「表」にしてみよう。

四季説		
春	風または温	生または発生
夏	熱または暑	長または繁茂
秋	燥	収または収穫
冬	寒	蔵または納蔵

五季説			
春	風もしくは温	生	発生
夏	熱	長	繁茂
長夏	暑もしくは火、又は 湿あるいは湿熱	化	化実
秋	燥	収	収穫
冬	寒	蔵	納蔵

六季説		
初之気	風または温	発生
二之気	熱または暖	生長
三之気	暑または火	繁茂
四之気	湿または湿熱 また暑湿	化実
五之気	燥	収穫
終之気	寒	納蔵

「四季」の性質については「風・熱・燥・寒」もしくは「温・熱・燥・寒」または「風・暑・燥・寒」などのように、論者によって用語に違いはあるが、そのような性質が生命に作用する生命への影響については「生・長・収・蔵」として論じられていて異論がないようである。同じことを表現しているのは一見して明らかである。

「春・夏・長夏・秋・冬」の「五季」に見る場合については、「風もしくは温・熱・暑もしくは火または湿あるいは湿熱・燥・寒」のように、季候的な性質を表現している。「もしくは」「あるいは」「また」と筆者が記述したように、異なった語が用いられているが、これも結局は同じことを表現している、と見るべきものであろう。これは、季候のかかる性質が、生命に感作した「命への影響性」について表現している所を一見すれば明らかになる。「発生・繁茂・化実・収獲・納蔵」と表現する、これが一文字で表現されるときには「生・長・化・収・蔵」という場合が多い。

一年の循環を「六気」「六季」に見る場合では、「三陰三陽」の名つまり「厥陰」「少陰」「少陽」「太陰」「陽明」「太陽」の「六経」名を用いる場合と「初之気」「二之気」「三之気」「四之気」「五之気」「終之気」と呼んでいる場合がある。その性質については「風または温」「熱または暖」「暑または火」「湿または湿熱または暑湿」「燥」「寒」と表現され、あるいは「風もしくは温」「熱」「火」「湿」「燥」「寒」のように記述される。これの生命・生活への影響性を「発生」「成長」「繁茂」「化実」「収獲」「納蔵」と表現される。

『病邪』として表現されている場合を見ると、「四季」の場合では、「風邪」もしくは「温邪」・「熱邪」・「燥邪」・「寒邪」となっており、「五季」の場合には「風邪もしくは温邪」・「熱邪」・「火邪もしくは暑邪または湿熱邪または湿邪」「燥邪」「寒邪」のように記述され、「六気」「六季」に見ている場合では、「外感の六淫」とされている場合の用語の「風・熱・火・湿・燥・寒」の「邪」と見て表現される。

「六気」「六季」に見る場合の「季節の気」の性質についての認識と、その「生命への影響性」と、「六気」「六季」に旺気する「臟腑経絡」と、についての認識を、近年発見された『葉註難経』〈張元素・潔古〉に記述されているので、それを現代訳に意識して見よう。

「A～いわゆる一陰一陽の脈というのは、脈が拍動して来る姿が沈脈でまた滑脈も見せている脈動のことである。そう言う脈状は腎脈とされる脈である・そのような少陰腎の脈拍があらわれる時期は「寒」であって、そう言う「寒」の作用する性質は「堅」である・このような「腎」の名は少陰の病にも与える・それはつまり十一月十二月の気なのである・脈位は左である。

B～一陰二陽の脈と言うのは、沈で滑脈であってさらに長脈が混合して拍動して来る脈拍のことで、肝脈であるとされている・其の肝脈が現れる時期と言うのは「風」の時である・其の「風」の性質と言うのは「動」という一動き回る・動揺して定まらないものであって、厥陰肝脈の旺気するのは一月二月の季節である。故に正月二月の気なのである・脈位は左の関の部位である。

C～一陰三陽の脈と言うのは、脈状としては浮脈で滑脈でも長脈でもあって時々沈脈が混合されるものである。これは少陰心が旺気している脈状である・其の時の状況は熱・そしてその熱の性

質と言うのは「軟」なのである・三月四月の気であって・左寸の部が脈位である。

D～一陽一陰の脈と言うのは、脈状が浮脈で瀦脈でもある脈で、これは少陽三焦が旺気している脈なのであり・其の時は暑・暑の作用する性質は「柔」である・五月六月の気であって・この脈は右尺の部位に拍動する。

E～一陽二陰の脈と言うのは、脈状は長脈で沈瀦の脈である。これは太陰脾の旺気している脈である・太陰脾が旺気する時期は湿の季節で・其れが及ぼす性質は「緩」で・七月八月の気である・右関がこの脈位である。

F～一陽三陰の脈と言うのは、脈状は沈瀦で短の脈でありしかも・時に浮脈となる脈である。これは太陰肺の脈である・太陰肺が旺気する時は燥の時期であり・其の燥が示す性質は「斂」と言うことである・九月十月の気であって・右寸が脈位である。……」

のように、在来解りにくかった『四難』の混合脈に関する記述を、極めて臨床的・实际的に解説してくれている。

『儒門事親』〈張子和・従正〉「卷十」の中で

「初之気・自大寒至立春、春分、厥陰風木之位、……正月二月少陽、三陰三陽亦同。二之気・春分至小満、少陰君火之位。陽氣清明之間、又陽明之位。三之気・小満至大暑、少陽相火之位。陽氣発、万物俱成、故亦云太陽旺。……四之気・大暑至秋分、太陰湿土之位。天氣吉感、夏後陰已用事、故曰太陰旺。此三陰三陽、與天氣標本陰陽異矣。脈緩大而長。燥金旺、緊細短瀦。以万物乾燥、明可見矣。五之気・秋分至小雪、陽明燥金之位。氣衰陰盛、故云金氣旺、其脈細而微。終之気・小雪至大寒、太陽寒水之位。陰極而盡、天氣所收、故曰厥陰旺。……」

と述べている。

『藥註難經』〈張元素・潔古〉の論とは異なっているが、一覧に便なように次のように書き直す。

大寒から立春・春分にいたる時期（初之気）～厥陰風木之位

……正月二月少陽・三陰三陽でも同じ

春分から小満にいたる時期（二之気）～少陰君火之位

……陽氣は清明の間にあるので・又陽明の位とも言う

小満から大暑にいたる時期（三之気）～少陽相火之位

……陽氣発・万物俱成・故に亦太陽旺とも言う

大暑から秋分にいたる時期（四之気）～太陰湿土之位

……天氣吉感・夏後陰已用事・故に太陰の旺とも曰う

此の三陰三陽と天氣の標本とは陰陽が異なっている。脈が緩で大であって長脈であれば、燥金の旺で、脈は緊細短瀦であり・それは万物乾燥を現わすことは・明らかに見える。

秋分から小雪にいたる時期（五之氣）～陽明燥金之位

……氣衰陰盛・故に金氣の旺と云う・其の脉は細而微

小雪から大寒にいたる時期（終之氣）～太陽寒水之位

……陰極而盡・天氣所收故に厥陰旺とも曰う

三陰三陽の配当が天干と地支では異なっていることを踏まえて見ると、『葉註難經』〈張元素・潔古〉の論に、本質上同じことを論じていると言えよう。

『葉註難經』〈張元素・潔古〉の場合も、『儒門事親』〈張子和・從正〉の場合も、天氣の両面性と・これに応ずる人氣の二面性を書いているのである。例えば、熱には少陰君火や少陽相火の時期が対応しているが、人氣の面では少陽相火や少陽相火の臟腑・経絡が対応して旺気する・病態における熱もまた同様である。この点を記述していると解される。このように多重的にオーバーラップしている世界を、論理として把えているからこそ、『難經』「四十九難・七十難・七十四難」の記述する診察と治療・配穴の世界が拓かれると、言うてよいであろう。

III. 診察によって病因を把える問題（49難・74難の記述から）

「六淫」＝「六氣」の身体への影響は、『外感病』の場合も『内傷病』の場合にも、強弱の違いはあるが、しかし、ともに大きな意味を帯びている。

これを、端的に記述しているのが『難經』の「四十九難・七十難・七十四難」である。「七十難」では「春夏には、陽氣は上部に在って、人の氣も上部にある。秋冬には陽氣は^{ひく}下くあって、人の氣も^{ひく}下いものである」と述べている。ここでの「陽氣」とは「自然の氣」のことに他ならない。「人の氣」とは「人の生理的な機能」に他ならない。動脈血は主に、夏には体表近くを流れて、熱が体に籠らないようになっており、冬は体奥部に流れて、体温が外気に奪われにくいようになっていることは周知のこと。多くの哺乳動物は、季節の替わり目には生え変わって、夏毛になったり冬毛になったりしている。季節に応じて体調にも必要な切り替えが生じているのである。「七十難」の記述は此のような変化を書いているのである。「七十四難」の記述では「……春刺井者、邪在肝・夏刺榮者、邪在心・季夏刺俞者、邪在脾・秋刺經者、邪在肺・冬刺合者、邪在腎……」のように、季節・ツボ・臟・外氣などの要素の五行性を見ると「春＝木・井穴＝木・肝＝木・風＝木」「夏＝火・榮穴＝火・心＝火・熱＝火」「季夏＝土・俞穴＝土・脾＝土・勞＝土」「秋＝金・經穴＝金・肺＝金・燥＝金」「冬＝水・合穴＝水・腎＝水・寒＝水」となる。

肝臟〈木〉を例にとって、俗な表現をすると「春の季節の性質」は〈温〉とか〈風〉と言われるが、五行的には「木」である。「木の性質を持っているツボ」は〈井穴〉である。肝臟は五行的には「木臟」とされている。

【「春の邪は風であって木性の邪である」故に、木性の臟腑・ツボに「邪の所在」として、同時にまた「人の氣の所在」としても表現されている】と言う訳である。

こう言う論理は、全ての季節・全ての季節の気・五行的な邪の全て・全ての臓腑に貫かれているのである。この論理は「部位」にも「経絡・臓腑」にも「体成分」にも「五体」にも、適用されると見るべきもののようである。

それは「触診」によって「五行」的変動が認知可能であることを示唆している。『素問』にも『靈樞』にも、体表における病的表現に関する記述が、少なからず見受けられる。また、古典的な価値を認められている医書にも「体表における病的反応表現」に関する記述がある。

「病因の診察」に関しては『難経』「四十九難」の記述は、大きな示唆に富んでいる。それは「五臓」と「五邪」の全てに及んでいる。これについては、既に『医黄集門・20号・'91』の「難経の診断法方論への示唆」、『医黄集門・23号・'94』ま「ツボと五行と病因」を記述した時に、かなり詳しく論じたので、ここでは枢要な点に絞って、再び論じることで、次の段階の論議の準備としておこう。

「正経自病」〈明らかに…「六十九難」の「正経自生病」は同一のもの…〉について論じた後、具体例として「心病」が「中風」の邪〈肝・木〉を受けた場合・「傷暑」の邪〈心・火〉を受けた場合・「飲食労倦」の邪〈脾・土〉に冒された場合・「傷寒」の邪〈肺・金〉に冒された場合・「中湿」の邪〈腎・水〉に冒された場合などのように、「外感性の病邪」全てに傷害された場合に起こる症状的な様相の基本的な姿を、その特長的な事柄を極めて明快に記述している。この記述は【病因の診断】を見事に導くものとなっている。この記述では極めて明瞭に、《「病邪の五行性」は「人身の生理機能の五行性」を媒介的に現象することによって、自らの邪の性質を示すものである》と言う認識を論じているのである。

例えば「中風」は「木邪」であるから人身の「木臓」＝肝臓の病証を惹起して、自ら病邪の五行的な性質を「主張」しているのである。「肝の病証」の特長は「弦脈・心下満＝脇下満痛・色の変化」であるから、「心」に入った場合には、「心の病証」の「洪脈＝浮大の脈。身熱（および煩・心痛）・赤色」が、「肝の病証」と平行して同時に現れる。「中風」が「肺」に入った場合には、「肺の病証」である「洒々として悪寒し」「喘咳し」「白色」が、「弦脈・心下満＝脇下満痛・色の変化」という「肝の病証」と平行して現れるので『肺が中風の病邪に冒された』ことが判るのである。

IV. 治療穴の決定問題

【病んでいる臓と病因の五行と同一の五行的な性質を持っている臓・この双方の病証が並行的または同時に現れる】と言うことを「四十九難」は明白に論じているのである。

（五邪と五臓の病証論的な関連性は、次の表を参照のこと）

この「四十九難」の記述と「七十難」「七十四難」の記述とは、相互に密接に関連しているから、《『病邪の病証反応表現』と『病臓の病証反応表現』は平行して現象する》原理によって、「ツボ」にも「経絡」にも五行性に則した反応として捉えられるものである。この点に着目すれば「井・

榮・兪・経・合」の五要穴の「主治証」の「心下満」は「肝病証」を約言したもの、「身熱」は「心病証」を、「体重節痛」は「脾病証」を、「喘咳寒熱」は「肺病証」を、「逆気而泄」は「腎病証」を、要約して記憶に便利のように記述したものに他ならない。この点が極めてはっきりしているのである。そうであるならば「肝病」には「井穴」そして「木経」を・「心病」には「榮穴」と「火経」を・「脾病」には「兪穴」と「土経」を・「肺病」には「経穴」と「金経」を・「腎病」には「合穴」と「水経」を用いるべきものであることを教えていると理解できるのである。

原理を極端に要約して論じたのであるが、このような原理を臨床に運用する場合には、「補瀉の決定」問題があり、「虚実の判定」問題がある。このような診察論問題の他に、「刺鍼手技」の選定問題があり、選定した技法を意図するように作用せしめられるかどうかという施術者の技術的能力の問題があり、体成分と臓腑経絡およびツボの関係問題があり、部位と経絡問題があり、経絡相互の関係の問題（…相生・相剋・長生・剛柔・子午・運氣など実に多面的な関係がある…）などのような「手技論」や「治療論」の問題などが、解決されておくことが必要である。

V. むすび

日本経絡学会での「鍼灸における証について」の討論と、それに引き続いて行われた「鍼灸病証学の確立」の討論、そして学会名称が「日本伝統鍼灸学会」に変更されても、なお継続されている討論は、我が国の鍼灸医学が大きな転回を行いつつあることを示している。この論議の中で私が注文した論がある。《「随証療法」論では、病を証の数に応じてある限られた数の枠組＝証に当てはめて解釈する。こうして決定された「証」に従って治療取穴の枠組も定まっている。これは問題ではないか?》と言うのがあった。在来の「随証療法」論の枠組みに極めて深刻な問題を突きつけた議論のように思われる。多数の議論参加が望まれる。

以上

病因・病蔵・脈象(49 難を中心に)

1992.6.21 八木素萌

病因 病蔵	当色 風(木) 弦脈 色に現象	惡臭 熱・暑(火) 大脈・臭に現象	喜味 勞・食・湿(土) 緩脈・味に現象	為声 傷寒(金) 濇脈・声に現象	出液 湿・液(水) 沈脈・液に現象
木 肝 主色	弦 脇下満痛 青 (正邪)	浮大－弦 身熱 脇下満痛 臊 (実邪)	緩－弦 体重嗜臥 四肢不收 脇下満痛 酸 (微邪)	濇－弦 洒洒惡寒 甚則喘咳 脇下満痛 呼 (賊邪)	沈－弦 少腹痛 足脛寒而逆 脇下満痛 泣 (虚邪)
火 心 主臭	弦－浮大 脇下満痛 身熱 赤 (虚邪)	浮大－散 身熱 煩・心痛 焦 (正邪)	緩－浮大 体重嗜臥 四肢不收 身熱 苦 (実邪)	浮大－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 身熱 言 (微邪)	沈濡－大 少腹痛 足脛寒而逆 身熱 汗 (賊邪)
土 脾 主味	弦－緩 体重嗜臥 四肢不收 脇下満痛 黄 (賊邪)	浮大－緩 体重嗜臥 四肢不收 身熱 香 (虚邪)	緩 体重嗜臥 四肢不收 甘 (正邪)	濇－緩 体重嗜臥 四肢不收 洒洒惡寒 甚則喘咳 歌 (実邪)	沈－緩 体重嗜臥 四肢不收 少腹痛 足脛寒而逆 涎 (微邪)
金 肺 主声	弦－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 脇下満痛 白 (微邪)	浮大－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 身熱 腥 (賊邪)	緩－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 体重嗜臥 四肢不收 辛 (虚邪)	濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 哭 (正邪)	沈－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 少腹痛 足脛寒而逆 涕 (実邪)
水 腎 主液	弦－沈 少腹痛 足脛寒而逆 脇下満痛 黒 (実邪)	大－沈濡 少腹痛 足脛寒而逆 身熱 腐 (微邪)	緩－沈 少腹痛 足脛寒而逆 体重嗜臥 四肢不收 鹹 (賊邪)	濇－沈 少腹痛 足脛寒而逆 洒洒惡寒 甚則喘咳 呻 (虚邪)	沈 少腹痛 足脛寒而逆 唾 (正邪)

註：五蔵脈狀の記述は 4・5・10・13・15・49 などの諸難 五蔵色体の記述は 34・40 などの諸難